

＜東京編＞

日本に留学してきた学生にとって、東京というのは最も外国で情報を得ることができる都市です。外国でテレビなどに映る日本の都市はほとんどが東京であると言ってよいのではないのでしょうか。

世界でも東京は高く評価されているとして有名です。治安の良さ、経済的な裕福さ、そこに「古い日本と最先端の日本の融合」がしっかりと表現されていて、そこに生活感も兼ね備えたところが東京なのです。このような都市は、実は世界の中でもほとんどありません。そこで多くの人が東京に来て、古い日本を感じ、また新しい日本の家電製品などを買って帰るというような楽しみ方をしています。

さて、そんな東京に留学生を皆さんが案内する場合、どこを案内するか、それが問題になります。また、その場に行っても何の解説もできない、蘊蓄も披露できないのでは恥ずかしいです。そこで、東京の案内を、私なりに「初級」「上級」に分けて、解説してゆきましょう。

1 初級＜江戸と東京の遊び文化の中心地、浅草＞

やはり「初級」といえば、当然に東京らしく、「古い江戸情緒と新しい東京文化を感じられる場所」を案内し、なおかつ、留学生のほとんどが「東京観光」と言って思いつく場所ではないかと思いません。特に、留学生本人というよりは、留学生が国に帰ってまたは手紙やインターネットを使って親御さんに東京の感想などを送るでしょうから、それを見た留学生の親許の人々が「留学した子供たちはこんなところに行っているのか」というようなところを見せてあげたいと思うのではないのでしょうか。

では東京に「古い江戸情緒と新しい東京文化を感じられる場所」というような場所はどこがあるのでしょうか。もちろん、留学生に限らず、外国から来た観光客は、そのような「東京」を見に来ています。ですから、外国人観光客が最も多く訪れる場所が、「古い江戸情緒と新しい東京文化を感じられる場所」ということになるのではないのでしょうか。そのように考えると「浅草」という地名が出てきます。

現在の浅草は、浅草観音を祀る金龍山浅草寺とその隣にある二荒山神社を中心にした門前町の繁華街です。基本的には、東京の地下鉄銀座線の終点で、地上に上がると門前町の一角で隅田川に面した場所につきます。そこから数十メートル歩くと有名な「雷門」になります。また、もう少し街を見てゆきたいという人は、上野駅からバスで移動することも可能です。上野からのバスは「オープンバス」いわゆる「二階建てバス」が運行していますので、乗っていても楽しいかもしれま

せん。

浅草の門前町は、基本的に「仲見世商店街」「新仲見世商店街」という二つの商店街を中心に発展しています。雷門をくぐって、仲見世商店街があり、ちょうどクロスする形で新仲見世商店街を越えた、その奥に浅草寺があります。浅草寺の境内には、おみくじやお守りを売る場所もあり、また普段から縁日の屋台が出ていますので、楽しむことができるのではないのでしょうか。

さて、浅草の魅力の一つは「混沌」としたところではないのでしょうか。

ももとは浅草観光といえば、「浅草」だけではなく、現在の浅草寺の後ろ側に「吉原遊郭」が開けていて、浅草寺参りと同時に、ちょっと男性が遊んでゆくというような場所になっていました。

江戸時代は、町を取り締まる管轄がしっかりしていました。江戸の町は「八百八町」といわれていましたが、それだけ広いところの治安を守るのは、基本的には江戸町奉行の奉行所があり、その奉行所がかなり細かく「自身番」などを設置し、犯罪者の逮捕、事件捜査から市中見回り、道案内から老人の世話、急病人の手当そして、火の用心まですべてを司っていました。今から考えれば江戸町奉行というのは、「警察権」「捜査権」「司法権」を一か所で持っている役所ですから、かなり強大な権限を持っていたこととなります。しかし、広い江戸の町の中には例外がありました。それが「門前町」ということとなります。寺社仏閣は、江戸時代の通常身分制度「士農工商」から外れます。そのために「禁中並びに公家諸法度」と同様に「諸宗寺院法度」という規則が運用されていたのです。そのために、通常の判断ができなかったので、「寺社奉行」という奉行が特別に管轄していました。そのために、神社仏閣と、その近隣の門前町に関しては、江戸町奉行の厳しい規則ではなく、寺社奉行の範疇で規制されていたのです。

そのために、江戸の街で禁じられていることも、神社仏閣に入れば許されるということになっていました。例えば、江戸の街で犯罪を犯してしまっても、神社仏閣の中に入って保護されてしまえば、江戸町奉行はその中に逮捕しにゆくことができなくなってしまうということになります。もちろん、重犯罪、強盗や放火などは寺社奉行も協力しますからそんなに逃げることは出来ませんでした。しかし、例えば「不義密通」とか「姦通」などということ、あるいは、「軽犯罪」などに関しては、寺が匿うことも少なくありませんでした。最も有名なのは、鎌倉の東慶寺、群馬(旧、上野国新田郷)の満徳寺のように幕府公認の「縁切り寺」ですね。要するに離婚したいのに離婚を認めたくない武士の妻が駆け込んで離婚をさせてもらう寺で、ここに入れば、幕府も公認ですから手が出せないということになります。

話を戻しましょう。「それならば、江戸の町の中にさまざまな神社仏閣があったのではないか」とお思いでしょうが、しかし、上野の寛永寺と芝の増上寺は、将軍家の菩提寺または東照宮があるために、羽目をはずすことができないばかりか、かえって監視が厳しかったし、また、神田明神などは、お城に近すぎて、やはり町奉行などの取り締まりが強かったのです。また新宿を超えてしまうと江戸に日帰りできませんから、遠すぎますね。人通りが多くなければどんなに良い場所でも流行りません。そのような意味でちょうど、江戸の町のはずれ、しかし、上野の寛永寺の裏手でなおかつ白河街道や日光街道の通り沿いで人通りは多く、そして寺社奉行の管轄というのが、さまざまな「遊び」の栄える条件になっていて、そのすべてにぴったりだったのが浅草です。要するに、江

戸の町の中ではなかなか許してもらえないような「遊び」を、浅草寺境内や裏手の吉原遊郭では、認めてもらえたということになります。また、寺社奉行もわかっているのです、その辺はかなりお目こぼしがあったということになるのではないのでしょうか。そのために、浅草寺境内は、遊びの中心地として江戸時代から発展してきたのです。

そのようなことで「遊びの中心地」として発展してきたために、基本的に最も江戸の町人文化とそして遊びの文化が残ったのが浅草であるといえます。

政治が変われば政治の街はすべて様変わりしてしまいます。これに対して、「町人」のそれも「遊び」の街は、遊びそのものが変わらない限りそのまま生き続けます。また古い遊びも滅びてしまうわけではないので、古い繁華街と新しい遊びが共存することになるのです。さすがに昭和 33 年 4 月 1 日から売春防止法が完全施行になり吉原の遊郭はなくなりましたが、それでも庶民の娯楽である大衆演劇や落語、新しいものとして、日本で最初の遊園地である「花やしき」、それに現在でもできる競馬などの賭け事が浅草周辺に存在します。

まず、日本を知ってもらうには「日本の遊び」を知ってもらうということ、楽しさ、笑いの中で日本になじんでもらうのが最も良いのではないのでしょうか。さて、この中で日本語を勉強する留学生におすすめなのが浅草演芸ホールでしょう。日本人の庶民の生活や文化を取り込んだ笑いを「日本語」で共有するというのが最も良い勉強になりますし、もちろん、笑いながら勉強できるので、そんなに苦しくはありません。また、落語のオチは、掛詞になっているので、その意味や文化、または日本語の複数の意味を知っていないとなかなか笑うことができません。その笑いの中で日本語も文化も勉強できるのですから、かなりお得といえるのではないのでしょうか。

もともと浅草寺は漁師が隅田川で漁をしているときに、網に魚と一緒に観音像が引っかかったということ起源としています。その観音様を拝み、そして、日本の文化に触れる。演劇なども残っているので着物や刀(もちろん模造刀)もたくさん売っています。また、浅草ロックスなど、最新のショッピングセンターもあり、また見上げればスカイツリーも見えるという場所。観光には最も良い場所なのかもしれません。

2 上級

東京になれて来たら、さまざまなことが見えてくるはず。当然に日本の歴史に関しても興味が出てくるはず。その意味で、外国ではほとんどの国で「無名戦士の墓」というものがあります。それは、戦争に勝つ負ける関係なく、現在のその国があるのは、彼らの犠牲の上に成り立っているという真摯な気持ちがあり、同時に、その真摯な気持ちが未来に向けた志を作り出すということになっています。当然に、武運拙く敵弾に斃れた人々も、そのようにして、国家が繁栄し、子孫が平和に暮らすことを望んでいるはず。その気持ちにこたえる意味で無名戦士の墓や戦争の記念碑など、海外に行き、その国の歴史に興味を持てば、そのようなところに行くのが普通です。

中には海外の戦争関連施設に行くことを反対する人もいます。しかし、現在の国際関係の中において、その国の歴史があり、そして日本の歴史があるから、両国の関係が存在するのであり、

同時に、私たちが存在し、なおかつ私たちが行き来してお参りすることができるのですから、他国に行き、時間があればそのような施設に行くことはある意味でおかしなことではありませんし、日本に来たらそのような戦争関連施設を、それらの意味を伝えながらしっかりと歴史を踏まえたいで現在の日本のことを知っていただく必要があるのではないのでしょうか。

その意味で、東京において「戦没者の施設」といえば「靖国神社」であることは言うまでもありません。もちろん、国によっては靖国神社に参拝することを拒否または嫌う人もいるかもしれませんが、それはそのような説明が足りないからではないのでしょうか。

さて、靖国神社は、そもそも明治2年に明治天皇が、国を守るために国に殉じて亡くなった方の魂を鎮めるため社を作るべきという思し召しがあり、同年6月29日に「東京招魂社」として亡くなった方々の魂を鎮めるということを目的とした社を作りました。この時の明治天皇の思われたことは明治7年に初めて明治天皇が東京招魂社に参拝されたときの御製に現れています。

「我國の為をつくせる人々の名もむさし野にとむる玉かき」

国家のために尊い命をささげられた人々の御霊を鎮め、その事績を長く後世に伝えること、そのことによって平和な世の中にするを目的としています。

明治天皇がここに祀ったのは、嘉永6年(1853年)以降、要するにペリーが浦賀沖に来航した時以降、日本の国難に向かって行った人々をさすこととなります。そのために、明治維新の先駆けとなって斃れた坂本龍馬・吉田松陰・高杉晋作・橋本左内といった歴史的に著名な幕末の志士達もここ靖国神社に祀られています。一方、この時に幕府側または会津戦争での会津藩士や新撰組など幕府の側に立って斃れた多くの人々は祀られていないということになるのです。

その後、佐賀の乱・萩の乱・西南戦争などでの殉職者があり、それらの内乱から、「平和を願う」ということを多くの人が望むようになります。そこで「祖国を平安にする」「平和な国家を建設する」という願いが込められて、それらを総合し「国靖らかにあるように」という意味を込めて「靖国神社」という名称に明治12年、西南戦争の惨禍が明らかになったのちになっ変えられることとなります。なお、この効果は、西南戦争以降、日本国内において、訓練中の事故死は別にして、国内における戦争被害者が無くなったというように、靖国神社に参拝することによって平和の願いが実現するようになったのです。

現在靖国神社には、それら幕末の尊王の志士を含め246万6千余柱の方々の神霊が、身分や勲功、男女の別なく、すべて祖国に殉じられた尊い御霊として齊しくお祀りされています。また、祀られているのは軍人ばかりでなく、戦場で救護のために活躍した従軍看護婦や女学生、学徒動員中に軍需工場で亡くなられた学徒など、軍属・文官・民間の方々も数多く含まれており、その当時、日本人として戦い亡くなった台湾及び朝鮮半島出身者やシベリア抑留中に死亡した軍人・軍属、大東亜戦争終結時にいわゆる戦争犯罪人として処刑されたの方々などの神霊も祀られています。

日本人の感覚として、亡くなった方には邪念がないというような信仰があります。現在でも、亡くなった方に対して、あまり無礼なことを言うと一般に非難されてしまいますが、昔はもっとその傾向が強かったのです。日本人は、基本的に、魂がけがれていない状態で生まれてきており、その魂

にさまざまな社会の穢れがついてしまうことで悪い方向に動いてしまうというような感覚を持っています。そのため、亡くなって穢れがすべて落とされた状態では、もともとの純粋な魂になって、世界にさまざまな恩恵をくれると信じているのです。また非業の死を遂げたり、あるいは、何か特殊能力をもって死んでしまった場合は、死んでからその力で現在の人に恩恵をくれるということになりますから、当然に、その人の能力やあるいは不慮の死を繰り返さないというような願いを込める神仏として、信仰の対象となったのです。

例えば、靖国神社以外でそのようなところがあるのか、ということになります。平安時代、文章と勉強が良くでき清和天皇に重用され左大臣にまで抜擢された菅原道真は、藤原時平の讒言によって大宰府に配流されてしまいます。そして失意のうちに菅原道真は死んでしまいます。「東風吹かば匂い起せよ梅の花主なしとて春な忘れそ」という歌は、遠く九州の大宰府から京都に残してきた梅の花を思っ詠んだ和歌として有名です。そして菅原道真は、死後怨霊として、京都の人々を呪い殺します。そこで、讒言を取り消し、天満宮としてたてまつることになったのです。それが現在、受験生の神様そして学問の神様として有名な「天満宮」ですね。関西の人は「天神さん」といったほうがなじみがあるかもしれません。

要するに、讒言で恨みを残して死んでいった菅原道真も、その怨霊を鎮めれば、生前に持っていた「文章がうまい」「勉強ができる」ということの信仰の対象になるということになります。

これは、日本人の中に「力」がマイナスに向かえば「怨霊」であり、プラスに向かえば「ご利益」というような考え方があります。もともと菅原道真の場合は、力がマイナスの方向に向かったので、「怨霊」となり、そして「恨んだ人を祟り殺す」ということになります。しかし、「人を祟り殺す」要するに「人の命や運命を変える力がある」ということは、その力がプラスに向けば、「他の人よりも多大なご利益を受けさせてもらえる」ということになります。キリスト教やイスラム教のような一神教の場合、力の発揮するベクトルが変わることがありませんが、日本人をはじめとする多神教、または輪廻転生のような事を考える死生観を持っている場合は、「力」と「方向性」を別々に考えます。そのために、「怨霊の力を逆にすればご利益が来る」というような考え方が成立するのです。この他にも「平将門を祀った神田明神」なども、同様に、商売の神様として有名になりますし、千葉には「佐倉惣五郎」などの「義民」が祀られるところもあります。

さて、靖国神社は、そのような意味で、「戦死した人」のその思いが「自分たちが、または自分たちの子孫が自分と同じような死に方をしなくてよい様に」というように、力のベクトルを変えることによって、「戦死者を奉ることにより、平和を実現する神社」ということになるのです。

そして、同時に「死んだら終わり」ではなく、「死してなお国の平和のために力を尽くす」ということが、日本人の考え方の中には非常に強く影響します。日本人は、その「使命」と「プライベート」を分けて考えます。靖国神社に祀られている御霊も同じで、「個人の墓」という存在は別にあり彼らの「使命感」「公的な部分」の魂だけを祀るということになります。戦争において戦犯などの考え方がありますが、靖国神社に祭られている御霊は、純粋に国家のため、自分の愛国心に従ってその命をささげたのです。それは、日本でなくてもどの国でも同じではないでしょうか。そのような意味で、靖国神社では「戦争の歴史」と同時に「日本人の死生観」を学んでいただき、留学生に、日本

人が根本的に何を考えいるか、その根本的な考え方を知るために、行く場所が「靖国神社」ではないかと思います。そこまで説明できる場合、またはそこまで留学生の皆さんが興味を持った時、ぜひ靖国神社で日本人の死生観を考えていただければよいかと思います。

さて、靖国神社に行ったら、遊就館に行くのは当然として、もう一つ重要なところに行っていたきたいと思います。

それは「鎮霊社」です。これは戦争や事変で亡くなられ、靖国神社に合祀されない国内、及び諸外国の人々を慰霊するために昭和 40 年に建立された建物です。靖国神社の本殿に向かって左側にひっそりとあります。幕末、明治維新において日本国内で日本国のために働きながら合祀されない人はたくさんいます。戊辰戦争の幕府側、会津戦争の志士や新撰組など、それに西南戦争の西郷隆盛なども合祀されていません。そこで、これらの霊が怨霊となり祟りを為さないように、といえは少し不謹慎ですが、合祀されない理由のある人も同じ境内の中で慰霊をするという場所です。歴史を少し学べば、西南戦争など朝廷には向かって賊軍となった人々がどのようなようになったか、それが知りたくなると思います。日本の死生観を考えれば、その人々も菅原道真のように祀られて当然と思うでしょう。それが体現されているのが「鎮霊社」です。しかし、なかなかここまで参拝する人がいないので、常にひっそりとしています。是非、日本を学ぶ際には、このような「影に隠れてしまった人々」が祀られた場所も行っていただきたいと思います。